

津波までの「30分」

## 記録と検証 必ず後世へ



# 論者 記者

3・11

立川支局 三浦 英之

遺体はどれも、一カ所に寄せ集められたように折り重なっていた。

リボンを結んだ小さな頭が、泥の中に顔をうずめている。細い木の枝を握りしめたままの30代の男性がいる。消防団員が教えてくれた。

「津波は引くとき、川のように流れて同じ場所を流れていく。そこに障害物があると、遺体がいくつも引っかかってしまう……」

遺体は魚の腹のように白く、ぬれた布団のように膨れ上がっている。涙があふれて止まらない。隣で消防団員も号泣していた。

震災翌日から現地に入り、18日間取材を続けた。最初の数日はまともに記事が書けなかった。目の前の惨状に、何がニュースかわからなくなり、気がつくとき空ばかり見上げていた。

「なぜ、こんなにも多くの人が——。がれきの中を歩くとたびに、怒りと悲しみに満ちた疑念が、胸のなかに押し寄せた。」

被災地では、土砂にまみれた時計の多くが、地震が起きた午後2時46分ではなく、午後3時20分前後で止まっている。津波が押し寄せた時間だ。多くの命が奪われたのは地震発生直後ではなく、おそらく約30分後のことだ。

そう思う度に、胸が張り裂けそうだった。「30分」は決して長くはないが、何かしらの対策を講じることができた時間だからだ。

その与えられた時間を有効に使える対策や手だてを、私たちは事前に準備することができていたのだろうか。答えはたぶん「ノー」だろう。今回の津波では、海岸沿いに建てられた病院や老人施設でたく

さんの人が亡くなっている。多くの人が車で移動し、避難所さえも津波にのまれた。

私たちが真っ先に取り組むべきこと。それは、あの30分に人々がどう動いたのかを克明に記録・検証することだと私は思う。それを新しい国や地域の仕組みにいかした上で、後世にしっかりと語り継いでいこう。

高齢者や障害者を災害からいかに守るのか。いざという時に正しく動ける知識と勇気を、子どもたちにどう身につけさせるのか。そのためには何よりも、あの30分の教訓と反省が必要だ。

悪夢からもうすぐ1カ月。多くの人が今もがれきの中をさまよい歩くこの国で、できるだけ多くの記憶と言葉と映像を残そう。生き延びることができた私たちの、それが最大の使命だと感じる。

< 2011年4月9日 朝日新聞(日) 抜粋 >